

最後の恋のはじめ方

2005(平成17)年3月18日鑑賞(試写会・リサイタルホール)

★★★★



監督＝アンディ・テナント／出演＝ウィル・スミス／エヴァ・メンデス／ケヴィン・ジェームズ／アンバー・ヴァレッタ／ジュリー・アン・エメリー（ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2005年アメリカ映画／118分）

……『ニューオーリンズ・トライアル』の主役は陪審コンサルタントだったが、この映画の主役は何と「デート・コンサルタント」！ さすが自由と民主主義の国アメリカには、色々な職業があるもの……？ 一歩まちがえばヤバそうな仕事だが、この映画はあくまで楽しくそしてコメディタッチで、しかし最後にはきっちりと2組の男女の「真実の恋愛」の姿を描いていく。恋愛に不器用な今どきの若い男女には、いい勉強になるかも……？ しかし、「きっかけづくり」と「演出」そして「ヤラセ」の線引きは難しいよ……？

陪審コンサルタントの次はデート・コンサルタント

陪審法廷ドラマの話題作『ニューオーリンズ・トライアル』（03年）の主役は、最新のハイテク装置を駆使しながら陪審員の評決を操る陪審コンサルタントだった。アメリカではこんな職業が立派に成立していることをみて驚いたものだが、本作の主役アレックス・ヒッチ（ウィル・スミス）の職業は何とデート・コンサルタント。彼は「そういう仕事」であるため（？）、ハデな宣伝や広告はせず、看板も掲げず口コミのみでお仕事をやっているようだが、映画を観る限り、高級アパートに住み十分リッチな生活をしていることはまちがいない……。彼の仕事における料金体系はどうなっているのだろうか？ そしてまた彼の収入は？

デート・コンサルタントという仕事の難しさ

デート・コンサルタントは、真剣な恋愛がしたいと思っていくらがんばっても、

不器用で恋愛のコツをつかめない男性諸君に対してそのコツを伝授するのが仕事。しかし、これはちょっとねじ曲げられれば、セックス目的のいいオンナ斡旋業に簡単に転化してしまう危険な仕事。現にこの映画の中でも、ある依頼者は、アレックスに対して露骨にそれを依頼（要求）してきた。アレックスは毅然としてそれを断ったが、果たして現実は……？

デートにおける「きっかけ」「演出」「ヤラセ」の線引きは？

アレックスの仕事は、ひと言でいえば「きっかけ」をつくること。1つのきっかけでデートが突然スムーズに展開していくことは、この映画を観ているとよくわかる。したがって真剣にこの映画から学べば、いかにうまくきっかけづくりをするかについてかなり高度な恋愛テクニックをマスターできるはず。しかしそこで難しいのが、きっかけと演出そしてヤラセとの線引き……。たとえば、あなたが彼女に近づきたいと思ったとき、サクラになってもらった友人たちに彼女に絡んでもらい、そこにあなたが登場してそのサクラたちを追っ払えば、あなたはたちまちヒーローになるはず。しかしそんな演出あるいはヤラセをしてまで彼女に認めてもらうことをあなたは肯定する……。さらに、後になってそれが演出、ヤラセだったことが彼女にバレたら、彼女は どう思う……？

ところが、これをデート・コンサルタントにやってもらえばどうだろうか？ その場合、果たしてあなたは彼女に対する良心の呵責（？）がなくなるのだろうか？ そうであれば、デート・コンサルタントに料金を払って「きっかけ」をつくってもらう意味があるし、デート・コンサルタントも立派な職業として成立することになる。そして、結果的に2人のデートが成立しそこから恋愛が成就すれば、万事ハッピー……。まあ、そうなればそれでいいのだが……。

○○コンサルタントという仕事は？

私は弁護士の仕事をしているが、弁護士法第1条1項は「弁護士は、基本的人権を擁護し、社会正義を実現することを使命とする」と定めている。しかし弁護士の仕事は別の言い方をすれば、法律問題をメインにした総合コンサルタントともいべきもの……。世の中が複雑になり情報が多くなるにしたがって、近時

さまざまなコンサルタント業が現れてきた。私のライフワークとしている都市問題においては、都市再開発についてのコンサルタントという職業が立派に存在しているし、再開発コーディネーターという職業も成り立っている。

近時多いのが、「経営コンサルタント」。〇〇相談所とか〇〇コンサルタントという、いかにも親切で相談者の役に立ってくれそうなイメージだが、実はそれは……？ だってこんな仕事は何の資格もないまま、勝手に〇〇コンサルタントと名乗ればいいだけなのだから。『ニューオーリンズ・トライアル』の陪審コンサルタントにしても、本作のデート・コンサルタントにしても、何の資格もなく、自分で勝手にそれを名乗っているだけのこと。もちろんこれが立派に機能すれば、何の問題もないのだが、「デート・コンサルタント」という仕事が増えてくると、食べ物にされたり、騙されたりという被害も起こりそう。自由と民主主義の国アメリカでは、これもすべて「自己責任」で処理されるのだろうか？

アルバートとアレグラ

この映画で描かれるアレックスの仕事のメインは、アルバート（ケヴィン・ジエームズ）とアレグラ（アンバー・ヴァレッタ）との恋愛指南。アレックスがアルバートに教授する数々のアドバイスとテクニックは、それなりに適切なもので、それを実践したアルバートはたちまちコール財団の娘で超セレブのアレグラの心を射止めることに……。しかしこりゃ話ができすぎている。アルバートのような不器用な男が、アレックスのアドバイスでたちまちこれだけ変身できるのなら、誰でも映画スターになれるはず……。だって多くの悩める人たちにとっての問題は「わかっているけどできない」ということなのだから……。

アレックスの職業選択の動機は？

アレックスがデート・コンサルタントの仕事をしたのは、過去に自分も不器用で恋愛に失敗し、みじめな思いをした体験があるから。映画の冒頭アレックスがすべての観客に伝えるメッセージや、パンフレットの中に具体的に書かれてある、『『ヒッチ』の恋愛基礎講座 『しあわせになるための、男と女の恋愛方程式——9つの法則』』は、すべてそれなりの合理性のあるテクニックの数々。しか

し問題は、頭の中ではわかっているとしてもその実践は容易ではないということだ。アレックスにしても、学生時代不器用だった彼がなぜ今はこんなにデートテクニックを駆使できる男に成長（変身？）したのか、実はよくわからない。まあ、この映画はラブ・コメディ、ロマンティック・コメディだから、そこまで真剣に考える必要はないのだが……？ もっとも、彼にとってはデートや恋愛は商品だから、その商品に自ら手を出してはならないことはどんな職業でも同じ……？

サラはちょっとイヤな女……？

この映画の女主人公サラ（エヴァ・メンデス）は、『レジェンド・オブ・メキシコ』（03年）や『タイムリミット』（03年）で私もおなじみの美女だが、この映画では面白い味（？）を出している。サラはNYスタンダード紙の記者だが、ゴシップ記事の担当だから他人のスクープを取りあげることによってキャリアを上げた給料を上げていくという仕事。それだけでも私にはあまりいい仕事とは思えないが、そのうえ彼女は男性にはほとんど興味がなく、恋愛願望もほとんどないという女性。ホントにそんなオンナがいるのかどうか……？ 私の判断では、多分そんなオンナはいないはず。現にこのサラだって……？

それにしても、一方で自分の美しさを十分意識していながら、そんな自分に言い寄ってくる男を次々とはねつけているサラの姿をみると、私の目には何となくイヤな女だと思えてくるのだが……？

やっぱりテクニックより真心……？

たしかにアレックスが言うように、デートや恋愛においては、きっかけづくりのテクニックをはじめ数々の「口説きの法則」があるだろう。そして映画の中でも、それによって見事にデートや恋愛が成立する様子がいくつか描かれている。それはそれで「要、注目！」そして大いに学習してもらいたい。しかし、このようなテクニックに勝るものは何か？ それは真心！ 私のような中年おやじが堂々とこんなことを言うのは何となく気恥ずかしいが、特に男は真心！ 私の持論はあくまでこうだが、さてこの映画では……？

2005(平成17)年3月19日記